

「子どものレジリエンスを高める授業づくり」

～ 教師と子ども、子どもと子どもを『つなぐ』活動を通して～

1 研究概要

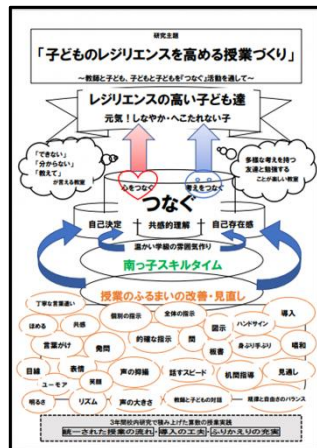
今、私達南小学校の教員は、教師としての在り方について考えている。毎日、子ども達の心の声に真剣に耳を傾けているだろうか。子ども一人ひとりの行動、言葉、表情を注意深く見取り、その奥にある考えや思いを汲み取る努力はしているだろうか。本市における命に関わる事案は、私達教員一人ひとりに、これまで自分自身が子ども達とどのように関わってきたのかを自問させ、いつも寄り添う教師でありたい、温かく安心できる学校でありたい、と改めて強く願わせた。今、私達が変わらなくてはいけない。この強い思いが本研究の大きな原動力である。

レジリエンスとは、「落ち込みにくい力」「落ち込んでも、立ち直り、適応していける力」である。本校の全児童を対象に、子ども達のレジリエンスを測る尺度として、レジリエンスを支える3つの力「元気・しなやか・へこたれない」に関する14項目のアンケートを行った。結果は、全体的にレジリエンスが高くはなく、学年が上がるにつれて低くなる傾向があった。大人に言われたことは真面目に取り組むが、自らアイデアを出したり、失敗を恐れずに挑戦をしたりすることが苦手な子が多いという児童の実態が見られた。これらの結果から、レジリエンスを高めることを柱に、本研究を進めることとした。

仮説① 授業中の教師と児童の関わりにおいて、子ども一人ひとりを大切に作る声かけやふるまいの工夫をすれば、共感的人間関係が育ち、レジリエンスの高い子が育つだろう。

仮説② 教科の授業において、子どもの意欲を引き出す導入の工夫や分かりやすい指示の工夫をすれば、学ぶ楽しさを味わわせることができ、自己決定の場や自己存在感を与える授業になって、レジリエンスの高い子が育つだろう。

<研究の構想図>



2 研究成果

(1) 研究授業について

①指導案の工夫

教師が意識的に行うふるまいと、なぜそのふるまいを選択したのかという＜教師の思い＞を指導案の中に入れた。これまで無意識で行っていた授業中のふるまいを客観的に捉えることができた。

②研究協議の充実

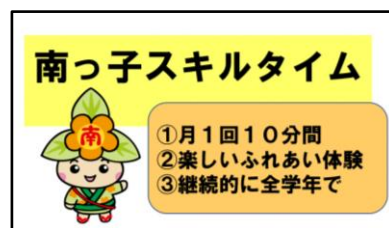
授業者のふるまいに注目して参観し、そのふるまいを生徒指導の3要素「自己決定・共感的理解・自己存在感」に分けた。子どもの学びの姿を観察し、その原因を探ることで、授業を「見取る力」が養われた。

(2) コミュニケーションスキル活動の取組について

朝の時間に、「南っ子スキルタイム」というコミュニケーションスキルを学ぶ活動を全学年で行った。「つなぐ」授業の土台となる温かい雰囲気のを学校全体で育んだ。

(3) 教員一人ひとりの意識変化について

これまで個人のセンスや経験で培われてきた教師のふるまいについて改めて考えることができた。ふるまいの奥にある自身の考えにも注目ができるようになった。



（「南っ子スキルタイム」の様子）



3 今後の課題

子どものレジリエンスを高めるための「つなぐ」授業には、どのような教師のふるまいが意識的に行われているのか、より具体的にまとめていきたい。また、子どもの変容を明らかにしていきたい。

わかる国語科の授業の研究

～ICTを活用して～

1 研究概要

自分の考えを伝えられる児童・全員で話し合いができる児童・意見をまとめられる児童

(1) 児童が自分の考えを持つ工夫

① 学習に見通しを持たせる。

児童が学習の見通しを持つことができたなら、どのように活動すればよいのか分かり、児童は自分の考えを持ちやすくなるのではなかろうかと考えた。授業の始めや活動始めに学習の流れを提示し、説明した。



② ICTを活用して、知識・経験・理解を補う。

教師や児童がICTを活用すると視覚から児童の知識や経験や理解を補えるのではなかろうかと考えた。

ICTを活用して、教師は画像や動画を提示したり、児童は分からないことを調べたりした。



③ ICTを活用して、意見を視覚化する。

自分の意見や友達の見えがわかりやすくなることができたら、考えを出す意欲が高まり、話し合いが活発になり、まとめやすくなるのではなかろうかと考えた。Jamboard や schoolTakt



や Google の共同編集などを活用して、個人のタブレットや大型ディスプレイに表示して、視覚化した。

(2) 教師研修

① 7月27日『国語科で目指すもの』

淑徳大学 特任教授 山本 直子 先生
国語科で目指す基礎基本の知識技能や教材研究の方法などを実践紹介していただいた。

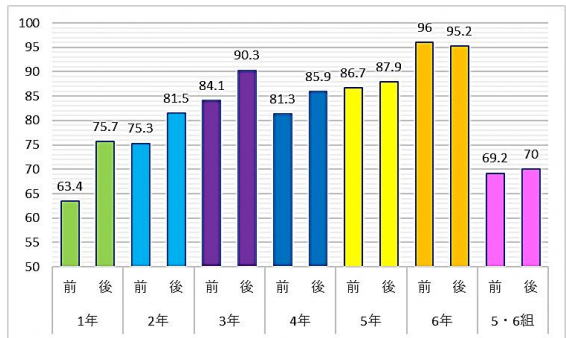
② 8月23日『schoolTakt の使い方』

コードタクト 鈴江 崇 様
schoolTakt の基本的な使い方から、教科書画像を使ったワークシートの作り方などを教えていただいた。

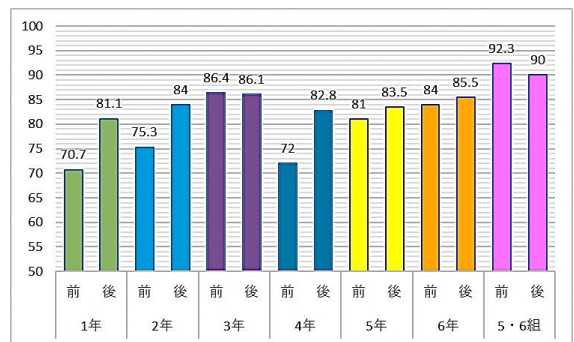
2 研究成果（児童・生徒の変容等）

(1) アンケートより

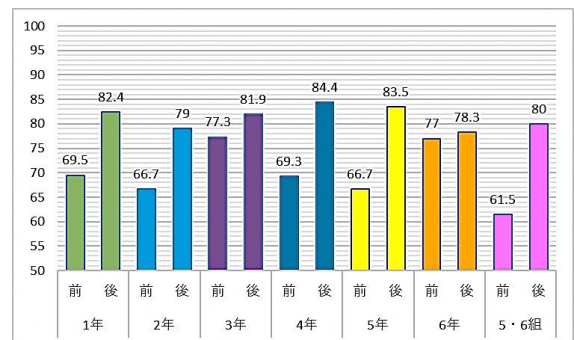
① 話し合いで自分の意見を持つことができる。



② 話し合いで自分の意見を伝えることができる。



③ Chromebook を使うと意見を発表しやすい。



- ・自分の意見を持つこと・伝えることができる児童が増えた。
- ・Chromebook を活用すると児童は意見を発表しやすと感じる児童が10%増えた。
- ・考えをまとめるためには、Chromebook を活用して視覚的に意見がわかる方が話しやすいということが分かった。

3 今後の課題

- ・ICTを活用する場面の精査。
- ・他教科への応用。

主体的・対話的で深い学びができる児童の育成

～かかわる・わかる・できるを追究する楽しい明峰小体育～

1 研究概要

(1) 運動量を確保できる場の工夫

① 場づくり

一つのことをできるように考えて取り組むことは重要だが、「たくさんのができた。」「たくさんやったらできた。」と実感できることが、意欲をより高めるうえで大切であり、運動の動きを慣れていく中で定着させていくことが重要である。

② 安全性の確保

器械運動は、怪我と隣り合わせの競技である。また、個人差も大きく、児童一人一人に合った学習環境を配慮しなくてはならないため、スモールステップで学べるよう、段階的な場を設定した。

(2) かかわり合い・学び合いの時間の確保

① 作戦会議の確保

基本的な技能の習得に加え、児童同士のかかわり合いの時間を増やし、「ここをこうしたら、このようになるのではないか。」というお互いの考えを入れたゲーム展開を行うことが大切である。

② 児童同士のアドバイスの時間の確保

児童同士のかかわり合いの中で、技能を高めるための、学び合いの時間を確保した。どのようにしたら技が上達するか、具体的に言葉かけをすることで、自分自身の技を客観的に見ることもできた。そして、自分だけでなく、他の児童も技のコツを習得し、上達することができた。

(3) ICTの活用

① 自分自身の技の動画撮影

自分自身の動きの確認をするために、Chromebookを活用した。その場で、自身の動きが確認できるよう、大型モニターを活用し、動画が時間差で流れるようにしたことで、自分のフォームを確認し、技の修正を図ることができた。



② 手本の撮影

正しいフォームや技をあらかじめ教師が撮影し、それを手本として見ることで、自分の技との違いを見比べ、どのようにしたら正しいフォームになるか、確認することができた。

2 研究成果（児童・生徒の変容等）

(1) 運動量を確保できる場づくり

- 今までは、周りに合わせた場を選んでしたが、自身の課題に合った場を選び、練習に取り組むことができた。
- サーキット学習を取り入れたことで、「たくさんのができた。」「もっとやりたい。」等の児童自身の学びに対する意欲が高まってきた。

(2) かかわり合い・学び合いの時間の確保

- 自分の考えだけでなく、他者と協力して活動することの大切さを学ぶ力がついた。
- アドバイスをすることで、技のポイント等を確認し、きちんと身に付けることの大切さを実感することができた。



(3) ICTの活用

- 自身の技をすぐに確認し、修正することができた。
- コート図を色分けしたことにより、視覚的にどの技を選んだらよいのかが理解できた。
- 正しいフォームや技の動画を繰り返し見ることによって、技へのコツや他の児童へのアドバイスに役立てることができた。



3 今後の課題

ICTを活用すると、運動量の確保が難しい。しかし、自身の技のフォームの確認や正しい技を理解するのに役立てることができる。正しい技を理解することで、他の児童へのアドバイスをすることができるが、外での撮影は、機材が壊れやすい。

体育は、運動量を確保することが大切な教科である。ICTだけに頼らず、体育カード等の活用をしていくことが重要だと捉えられる。



『授業のユニバーサルデザインを核とする指導』

— ICT を取り入れた支援 —

1 研究概要

(1) 教員の ICT 活用能力向上

令和2年度に「GIGA スクール構想 @ TOKOROZAWA」が立ち上げられ、1人1台端末としての Chromebook が整備された。そこで、まずは児童に指導する教員が授業において Chromebook を活用する力を身につける必要があった。

令和3年度には所沢市立教育センターから酒井真澄先生にご来校いただき、Chromebook の基本的な操作方法や授業における Google Workspace の活用方法についてご指導いただいた。動画の撮影や Forms、Jamboard、スプレッドシートなどを積極的に授業に取り入れることができるようになった。

令和4年度には所沢市立並木小学校の柳澤智仁教諭をお招きし、授業におけるスクールタクトの活用法についてご指導いただいた。スクールタクトはワークシート等の資料を作成する負担が比較的軽いこと、児童1人1人の学習状況をオンタイムで把握できること、児童の考えを共有しやすいことなど多くのメリットがあり、全学級で活用されるようになった。



(2) 授業のユニバーサルデザインを核とする指導

授業のユニバーサルデザイン化のポイントを本校では、①焦点化(学習のねらいや活動を絞り込む)、②視覚化(授業における情報や思考の流れを可視化する)、③共有化(それぞれの考えを伝え合い、話し合う)とし、その3点のためにどのように ICT が活用できるかを考え実践した。

令和3年度には、低・中・高の各ブロックで研究授業を行い、全教員で参観、研究協議を行った。そして令和4年度には、学校指導訪問と研究発表会で授業を行い、多くの先生方にご意見やご指導をいただいた。

現在もそれらの研修を生かしつつ、よりどの子にとっても分かりやすい授業、どの子も学ぶ楽しさを味わえる授業をめざし、日々取り組んでいる。

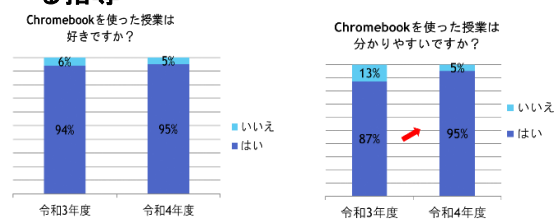


2 研究成果

(1) 教員の ICT 活用能力向上

様々な研修や実践を積み重ねてきたことで、どの教員も ICT を活用することの良さを味わうことができ、前向きに授業に取り入れることができるようになった。Chromebook 導入当初は、授業において ICT を活用することに負担を感じている教員も少なくなかったが、校内研修としてチームで取り組むことで、一人の負担感が減り、効果的に ICT 活用の良さを味わうことができたためと考えられる。現在も職員室で、情報交換したり、教え合ったりする姿が多く見られている。

(2) 授業のユニバーサルデザインを核とする指導



児童アンケートでは、Chromebook を使った授業が分かりやすいと回答した児童が8%増加した。昨年度は新たに導入された端末に対して児童の興味関心が非常に高く、扱うだけで楽しい、面白いと感じている児童が多かったと考えられる。それに対し今年度は活用することに慣れてきているにもかかわらず、分かりやすいと回答している児童が増えたのは、大きな成果である。教師が効果的に ICT を活用し、学習のツールとしての良さを児童に味わわせることができたためと考えられるからである。

また、研究発表会での参会者アンケートでは、多くの回答者に本校の取組が学力向上につながると答えていただくことができた。

3 今後の課題

今後も授業のユニバーサルデザインを核とする授業における効果的な ICT の活用について研修を積んでいく必要がある。また、先生方が作成してきた資料や積み上げてきたスキルを教員間で共有できるようにしていかなければならない。

さらに、児童の操作スキルの向上、情報モラルや情報セキュリティに関する指導、ICT 活用に関するルール作りも進めていかなければならない。

学ぶ楽しさ、できる楽しさが輝く中央小

～ 児童が主体的に学び、自己肯定感を高められるような外国語科・外国語活動の指導と評価 ～

1 研究概要

(1) 研究仮説

児童一人一人に学ぶ楽しさを味わわせ、児童の資質・能力に応じた評価から指導改善を行うことができれば、学びの充実につながるであろう。

(2) 研究の視点

【視点1】児童一人一人に学ぶ楽しさを味わわせる手立て

➡ 外国語の意味が分かる、会話ができることが活動・学習の楽しさにつながる。

【視点2】

必要感や達成感・自己肯定感を高めるための手立て

➡ 目的・場面・状況を意識し、必要感を大切にしたい授業デザイン

【視点3】児童の資質・能力に応じ、学びを見取る手立て

➡ ルーブリック評価の作成と効果的な活用を通じた指導改善（高学年）

(3) 各ブロックの取り組み

低学年

- ・外国語への安心感の醸成（日常生活で馴染みのある単語を選択）
- ・外国語に対する関心が向くような外国語を使った遊びや歌の導入
- ・3年生との接続を見据えた低学年の年間指導計画の作成

中学年

- ・朝の会等で日常の外国語活用（サイコロトーク）
- ・授業の導入で取り組む、月や曜日の歌、ジングルなどの選曲
- ・単元の1、2時間目、授業の導入におけるスモールトークの充実

高学年

- ・チェインゲームの充実（中学年のスモールトークの発展）
- ・タブレット端末での調べ学習や調べたことを発表する場の設定（必要感のある授業展開）
- ・スペリング確認の時間確保、市販教材の活用、振り返りカードの活用

特別支援学級

- ・体を動かす活動や映像・写真を使った展開の工夫
- ・自立解決を図り達成感を醸成する機会の充実
- ・個に応じた支援や評価の工夫

2 研究成果（児童・生徒の変容等）

低学年

- ・短いゲーム（アクティビティ）をたくさん行うと児童も意欲的になり、ゲームごとにつく力が違うことがわかった。
- ・身近なものからスタートし、皆が参加できる内容であることが大切。例：●●先生が好きな果物等

中学年

- ・授業の流れを各ブロックで統一できたことで、子供も見通しをもって学習できた。
- ・必要感のある問いをなげかけることで主体的な対話を促すことができた。

高学年

- ・言語活動が活性化した。
- ・児童と教師のやり取りが増えた。
- ・単元のゴールが明確化された。
- ・既習事項を活用するようになった。
- ・個から全体へ広げて授業を展開することができた。

特別支援学級

- ・個々のめあてをしっかりと明確に決めることができた。
- ⇒児童の見取り、実態を読み取ることができた。

3 今後の課題

- ・低学年は年間にすると授業回数を多くは取れない。どこまでを求めていくか基準を決めること。
- ・年間計画に AET、JET を入れて取り組んでいきたい。（低学年）
- ・身近な話題でスモールトークを行うようにする。（既習事項を踏まえてテーマを決める）
- ・配慮が必要な児童への指導、支援をどのように考えるか。
- ・チャンツの効率化
- ・ローマ字と英語とのスペリングの違い
- ・カリキュラムマネジメントを意識する必要がある。
- ・各学年によって異なる学習課題、到達目標を考慮して授業を作る必要がある。（特別支援学級）



写真 校舎内の掲示物

ユニバーサルデザインの視点を生かした授業展開の研究

～児童だれもが思考する授業を目指して～

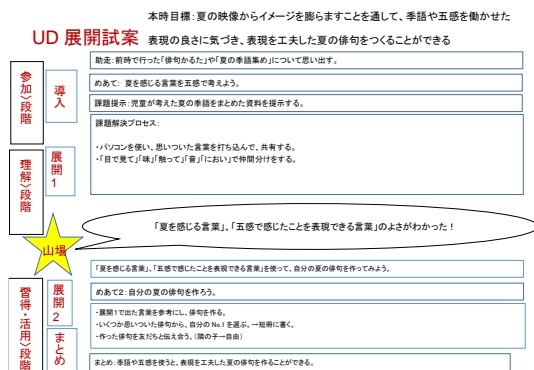
1 研究概要

(1) 研究経緯

本校児童は、主体的に思考したり、試行錯誤したりすることに苦手意識を持っている傾向が見られる。各学力調査では思考力を問われる問題の正答率が低い。支援を要する児童が増えてきていることや、児童個々の学力差が懸念されるようになってきたこともあり、UDの視点を生かした授業改善に取り組んだ。1年目は、環境部と授業部を置き、授業環境のUD化を図りながら、同時に授業改善を進めた。2年目には、主にICTの活用を授業改善の1つに加えた。3年目の本年度は、授業改善を軸として、教師の指導力を高めると同時に、児童の学力向上を図ることに重点を置いた。

(2) 授業の「焦点化」

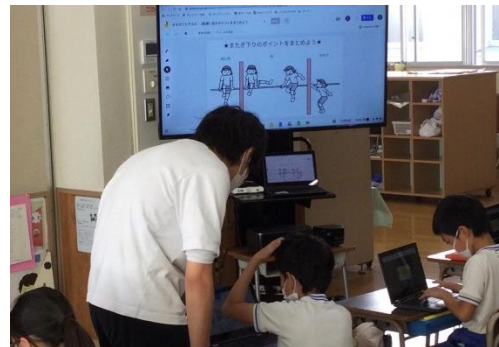
授業の山場から構成を考えていくよう、明星大学小貫悟教授から指導を受け、1枚で完結する指導案の作成に取り組んだ。山場や授業の構造の特徴がわかり、学習内容の本質を見極めること、シンプルに焦点化していくことができた。また、山場から逆算して授業の構成を考えることができるようになった。



(3) 学習の定着を図るための学び合いの工夫

「視覚化」「共有化」「ICT 機器活用」

学習のポイントを伝え合う際、テキストマイニングを用いたり、考えを構築させる際、ジャムボードを用いて互いの考えを「共有化」させたりした。スクールタクトを用いて、絵やグラフに整理する活動では、整理する過程を「視覚化」し、互いの考えを「共有化」することで、自力解決へとつなげ、ICT 機器の効果的な活用ができた。また、自分とは違う意見との比較や、考えを説明するのにも役立っていた。



2 成果と今後の課題

学校評価では、95.4%の児童が、「授業が分かりやすい」「楽しい」と回答している。習熟度の差はあるが、思考する授業を展開することができた。また、自分の考えとの比較や課題への迫り方が、共有化を意識させたり、ICT 機器を用いたりすることで明確になった。教師自身が、「焦点化」を意図的に計画することで、授業をシンプルに構造化することもできた。今後は、「楽しい」で終わらせず、学力としての定着や、「理解」し、「習得」したことを日常生活での実用や発展的課題につなげていくこと、各教科での取り組みを日常生活に波及関連付けていくこと、山場の妥当性や、構成の吟味についても実践していきたい。

「主体的」かつ「意欲的」に学習に取り組む児童の育成

～指導方法の工夫と ICT の活用を両立した授業改善～

1 研究概要

(1) 研究仮説

Chromebook 等の ICT 機器を効果的に活用した授業づくりをすれば、子供の学習への意欲が高まり、主体的な学習へとつなげることができるだろう。

昨年度、効果的に ICT を活用した指導方法の工夫という研究テーマで研修を進めてきた。Google のツールやスクールタクトなどの使い方について校内で研修を行ったり、指導主事に来ていただきご指導頂いたりしたことで、教師側の ICT 活用力を向上させることができた。授業研究協議会では、児童の「主体性」と「意欲」を向上させるための活用場面を検討し、算数に統一して授業を行ったが、ICT ありきの授業になってしまうなどの課題が残った。今年度は、昨年度の成果と反省を生かし、児童が「主体的」かつ「意欲的」に学習に取り組める授業を展開することを目標とし、ICT を活用していけるよう取り組んできた。

(2) 授業の実際

①第2学年 図工「くつつきマスコット」(鑑賞)

出来上がった作品の写真を Chromebook で撮り、発表の際に活用した。作品を鑑賞する際はグループの友達の作品の実物を個別に手に取って見られるようにし、感想を書く際もカードに鉛筆で書かせた。

ICT を活用して写真を大きく画面に出すことで、掌に乗るほどの小さな作品も学級全体の児童が一度に鑑賞でき、協働的な学習を進めることができた。



②第4学年 国語「アップとルーズで伝える」

Google Jamboard を活用してグループで1つの課題について、積極的に意見を交換させることを狙って授業を展開した。友達の写真を見てわかることや感じたことなどの伝えたいことを個別に考え、アップとルーズで伝えることの特徴を捉えさせた。その際、Jamboard を用いて付箋を貼

りつけ、データとして保存した。また、自分が選んだ写真は自分の伝えたいことが友達に伝わるものだったかを確認するために、グループで意見交換を行った。



③第6学年 国語「私たちにできること」

児童が説得力のある提案文を書けるようになることを狙って授業を行った。Chromebook を活用してモデル文を示し、文章構成を参考にしながら児童が個別に構成メモを作成し、それをもとに文章を組み立てられるよう支援した。Chromebook を活用することで、文章全体の構成や展開の順序を入れ替えるなどの文章構成をしやすくするとともに、文章に説得力をもたせる工夫を考えさせた。協働的な学習では、考えを交流させる時間を持つことで対話的で深い学びにつなげることを試みた。



2 研究成果(児童・生徒の変容等)

- ・個別の学びから協働的な学びにつなぐことで、一人一人が自分の考えを持ち、自分の考えをもとにグループで学びを深め合うことができた。
- ・ICT を活用することで、児童の学習意欲を高めることができた。
- ・挙手しづらい児童も自分の考えを入力することで伝えることができた。

3 今後の課題

- ・ICT を活用する上で、入力することに注力することで、話し合いとの両立が難しい場面があった。コミュニケーション能力をさらに高めるために、今後も研究をしていく必要がある。
- ・ICT の活用能力は向上したが、ノート指導とのバランスをとることが難しかった。

児童の論理的思考力を伸ばす指導の研究

～プログラミング教育を通して～

1 研究概要

本研究主題を設定するに当たり、次の点を本校として定義した。

「論理的思考力」とは、「根拠となるものをもとに、筋道を立てて考え、説明ができる力」とする。

「根拠となるもの」とは既習事項や確かな情報、データであり、「説明」とは、「言葉で、文章に書いて、スライドやパワーポイント等を使用しての表現」とする。

(1) 本校で育てたい力

- ① 物事の過程や結論を、筋道を立てて考える力
物事の過程や結論を、根拠をもとに順序よく考える力を育てたい。
- ② 分かりやすく説明する力
自分の考えを人に分かりやすく説明する力を育てたい。分かりやすく説明するためには、考えを整理してまとめる力も必要である。

(2) 方策3本柱

学び創造アクティブ PLUS の授業の基本形を元に、以下の3つの柱に重点を置き、育てたい力を育成する。

① ICTの効果的活用

単元における身に付けさせたい力をもとに、ICT活用の場面を検討する。

- ・学習の「比較」、「発見」、「共有」の場面
- ・情報収集や情報共有の場面
- ・schoolTaktで課題配布
- ・スライド作成
- ・プログラミングツールの活用



② 学び合いの仕方

児童相互の学び合いを深めるための教師側からのアプローチの仕方を考える。

- ・思考の「可視化」、「操作化」
- ・プログラミング体験から思考へ
- ・発問の工夫
- ・日常的に「順序立てて考えること」の意識化



③ 環境整備

児童の思考の様子が伝わるような環境整備を行う。

- ・板書の工夫
- ・掲示物の工夫



(3) 土台作り

「説明する力」を育てるための土台作り
説明する力を育てるためには、日常的なトレーニングや語彙の習得が必要である。

- ・論理的思考トレーニング
- ・プログラミングソフト
- ・読書 ・スピーチ ・辞書引き



2 研究成果（児童・生徒の変容等）

(1) 物事の過程や結論を、筋道を立てて考える力

- ・操作することで頭の中が整理できるようになってきた。
- ・自分の目的に合うツールを選び、効率化が図れるようになった。
- ・どの授業においても順序立てて考える児童が増えてきた。
- ・クラスの意見等を見ることができるようになったため、「比較」、「発見」、「共有」を自然とすることができ、意見や考えの幅が広がった。

(2) 分かりやすく説明する力

- ・思考の「可視化」ができ、話し合いが活発になり、深い学びにつながった。
- ・自分の考えを説明する際に、「根拠」をもとに説明する子どもが増えた。
- ・低学年も説明することがうまくなった。

(3) ICT活用能力の向上

- ・Chromebookの活用が日常化され、子どもたちの表現能力が向上した。

3 今後の課題

- ・論理的思考を高めるための教材研究をする時間の確保が難しく、実践研究がまだまだ足りない。今後も継続していく必要がある。
- ・説明するためには語彙力が必要だが、その基礎が足りないことから、どう表現するか幅がない。更なる基礎基本の定着を徹底していかなければならない。

「誰もができる、誰もが認める、いい授業」(西富スタンダード)の確立

～～GIGAスクール構想から～～

1 研究概要

(1) 教員のICT活用スキルの向上

本研究を行うにあたって、本校の教員のICT活用スキルは個人差が大きかった。以下の取組を通してその解決を図った。

① ICT支援員による校内研修

1学期、夏期休業期間に計3回のICT支援員を講師に招いた校内研修を実施した。

その中で、中心となったのはschoolTaktの活用方法である。使ったことがない教員がほとんどであったため、基本的な使い方から、授業資料の作成方法や授業での具体的な活用方法などについて詳しく教えていただいた。

② 授業実践の共有

校内研修の時間に定期的に情報共有の場を設けた。一人一台端末の効果的な活用方法、最近行ったschoolTaktを用いた実践など様々なICTの活用方法について情報交換がなされた。研究授業のみでなく、普段の授業でもすぐに活用できるような身近な実践を共有することで、ICT活用の機会が増える。それが教師のICT活用スキルの向上につながると考えた。

(2) ICTを活用した授業実践

① Google Workspaceの活用

Google Workspaceでは以下のように活用した。

・例) Jamboardの活用

Jamboardの利点は、同時に意見の交流や分類ができることである。それにより、意見の分布や整理が円滑になる。また、考える時間の確保にもつながる。

② schoolTaktの活用

schoolTaktでは以下のように活用した。

・例) ワードクラウド機能の活用

ワードクラウドを使うことで、一人一人の感じ方や考えの違いについて、視覚的に捉えることができる。

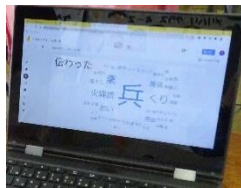


写真 ワードクラウドの活用の様子

③ キーボー島アドベンチャーの活用

年間を通して、キーボー島アドベンチャーに取り組むことでタイピング技能の向上を図った。

2 研究成果(児童・生徒の変容等)

(1) 児童のICT活用スキルの向上

キーボー島アドベンチャーに年間を通して取り組むことで、タイピング技能の向上が見られた。以下は、6学年1組における級の向上の推移である。

級と検定内容	4月	1月
24級以上の割合(%) ひらがなの単語を20文字/分	37	100
13級以上の割合(%) 漢字の短文を30文字/分	7	51
5級以上の割合(%) 色々な文字の長文を30文字/分	0	33

表 キーボー島アドベンチャーの級の推移

タイピング技能はICTを児童が活用する上で基礎基本となる技能である。タイピング技能が向上することによって、その他のICTの操作にも大きく役立ち、児童のICTスキルの向上につながっていくと考える。

(2) ICTの効果的な活用

各ブロックの研究授業や日々の授業実践を通して、ICTの効果的な活用方法や課題について一定程度検証することができた。以下にその一部を示す。

ICT	活用場面	メリット	デメリット
schoolTakt	算数、かけ算の式をおはじきで表す。	・散らばらない ・多くの意見を共有できる	
カメラ	図工、鑑賞	いつでも見ることが出来る	実物を見ることによる発見難しい
Jamboard	道徳、心のものさし	素早く意見の可視化ができ、議論の時間の確保につながる	

表 ICTの活用場面とそのメリット、デメリット

3 今後の課題

ICTの効果的な活用方法について、一定の検証ができた一方で、まだまだ手探りの部分もある。

授業に合った最適なアプリを選択したり、さまざまなツールの利用場面を検討したりするなど、授業のどの部分でどのようなICTを活用すれば、学習効果を高めることが出来るかについて、今後も実践を通して検証を進めていきたい。

「自己の目標に向け、主体的に体力向上に努める児童の育成」

～体育学習や家庭との連携を通じた手立ての実践～

1 研究概要

(1) 実態調査（児童・教職員・技能）より設定した研究仮説

【仮説①】

学年や学級の実態を把握し、それに応じた授業づくりを実施することで、児童の総合的な体力の向上を図れるのではないかと。

【仮説②】

新体力テストの結果をとらえ、家庭と連携した運動機会の充実を図れば、児童の体力が向上するのではないかと。

(2) 各研究チーム・特別支援学級の取組み

【授業研究チーム】 ・校内授業研究 ・学年体育の推進 ・校内実技伝達研修	【集計分析チーム】 ・児童・教職員の意識調査 診断・形成・総括的評価 集計 ・新体力テスト分析・考察 ・各授業研究の補助
【資料講習チーム】 ・「上っ子体操」考案 ・「上小チャレンジ」考案 ・新体力テスト指導法動画作成・研修実施 ・校内実技伝達研修	【環境整備チーム】 ・掲示物等の充実 ・備品整理や教具作成 ・授業環境整備 ・図書室の体育関連書籍の充実



上っ子体操の様子



体育コーナー掲示



特別支援学級の体育



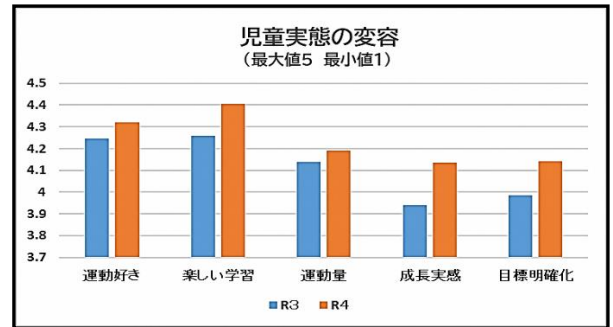
職員研修

【特別支援学級の取組】

- ・朝運動の継続的実施
- ・体育主任及び研究主任の授業参加

2 研究の成果

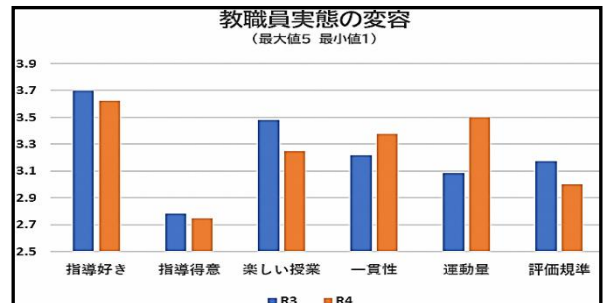
(1) 児童実態の変容



研究開始当初に比べ、体育科学習が「楽しい」と感じる児童の割合が増加した。考えられる理由が、①教師の指導力の向上②新体力テスト結果の児童による自己分析③児童や家庭での体力に対する意識の向上 である。

また、新体力テスト (A+B+C) 評価の割合は今年度 **8.3ポイント増加**した。

(2) 教職員実態の変容



研究開始当初に比べ、「ねらいやめあてを明確にした授業づくり」や「運動量」について数値が増加した。考えられる理由は、①教職員の授業の進め方の習熟②授業における環境の充実 である。

3 次年度の課題

①教職員の授業指導力への自信を高めるため、引き続き研修機会を充実させたり、学年・領域ごとの効果的な声かけ方法について研究を深めたい。また、②投能力と走能力 (短距離) のさらなる向上を目指し、上っ子体操や上小チャレンジ内容の改善、重点単元の共通理解を図っていきたい。



「学ぶ楽しさ、考える楽しさを感じる魅力ある国語授業づくり」

～「読むこと」における指導法の工夫をとおして～

1 研究概要

本研究では、国語の授業において、自分の考えを伝えることに自信を持てなかつたり、語彙力や発表力に個人差があったりするという本校の課題に対して、「児童が基礎・基本を身につけ、自分の考えを表現したり、他者との意見交流を通して自分の考えを再構築したりすることによって、達成感や満足感を感じられる授業」、また、「児童一人一人が見通しを持って学習し、自分の考えを持ち、自信を持って表現することができる授業」に向けて、以下の仮説を立て、授業改善を図る。

仮説①ゴールを見据えた単元構成を設定し、言語活動や意見交流のしかたを工夫することにより、児童が自分の意見や考えを明確に持ち、意欲的に学習することができるだろう。

仮説②言葉を大切に語彙力を増やす活動を重視することで、児童が学びを実感し、さらなる学びに生かすことができるだろう。

(1) 環境整備部の取り組み

- ① 国語コーナーの設置
- ② 学年掲示板を活用した児童参加型掲示物作成「つなげよう ひろげよう」
- ③ 授業内で実践に活かせる発表の仕方の検討



(掲示板に書き込む児童)

(2) 授業研究部の取り組み

- ① 授業プランシート作成
- ② 「国語学習スキル表」(北野スタイル)の作成
- ③ 「こつこつタイム」の計画、実施
- ④ 授業研究の計画、実施



(授業プランシートの一部)

ア 低学年ブロック

1年生「くじらぐも」

- ・書き込みやすいワークシートの工夫
- ・活発な意見交流のための体験活動の工夫



(ペーパーサートで動作化)

イ 中学年ブロック

3年生「モチモチの木」

- ・登場人物の気持ち(性格)を可視化する工夫
- ・めあてに即した話し合いのためのグループ学習



(豆太ハートで可視化)

ウ 高学年ブロック

6年生「やまなし」

- ・見通しを持って取り組むためのゴール設定の工夫
- ・意見交流を充実させるための少人数による話し合い活動の工夫



(なるほどカフェによる意見交流)

(3) 資料調査部の取り組み

- ① 「国語アンケート」の作成、実施、分析
 - ② 「こつこつタイム」の資料の作成
- ※「こつこつタイム」とは、児童の語彙力を伸ばすための年間を通した朝学習(15分)

(国語に関するアンケート)

2 研究成果(児童・生徒の変容等)

(1) 仮説①について

- ・単元計画を児童と共有し、児童一人一人が具体的にゴールを設定することで、見通しを持ち、意欲的に学習を進められる児童が増えた。
- ・学年の発達段階や実態に合わせ、ワークシートやノートへの記述を工夫することで、自分の考えを持ち、書き込みできる児童が増えた。
- ・自分の考えを持ち、少人数での意見交流の経験を重ねることで、自信を持ち、意欲的に自分の考えを表現できる児童が増えた。

(2) 仮説②について

- ・「こつこつタイム」で意味調べや「ことばのたからばこ」、ことわざ・慣用句など、多様なことばに触れる機会が増え、語彙力を伸ばすきっかけとなった。
- ・「つなげよう ひろげよう」の参加型掲示物では、休み時間にも友達と相談しながら書き込みをしたり、友達の書き込みを読んで共感したりするなど、ことばが身近になった。

3 今後の課題

- ・児童の意欲を高められる、発達段階に合わせた課題設定や学習活動の工夫。
- ・文に書く、発表するだけでなく表現方法の工夫、多様化。(ICTの活用など)

わかったできたおもしろいが実感できる学習の追究

～学び合い、高め合える授業作り～

1 研究概要

(1) 研究仮説と手立て

仮説① 学習過程に、ペア・小グループの学び合いの場を意図的に取り入れる。

《手立て》

ア 【個人→グループ→全体】の順に授業を展開することで、考えを伝えやすくする。

イ グループの編成を工夫する。

ウ 朝の会で「グループトーク」のような時間を作り普段から話し合いに慣れ親しませる

仮説② 多様な考えが生まれるような課題・指示・発問を工夫する。

《手だて》

ア 児童の学習意欲を高めることが出来るような「めあて」を設定する。

イ 本時の流れを示し、見通しを持たせる。(モニター画面の活用・時間の提示)

ウ 児童の思考や活動を促すようなわかりやすい発問を精選する。

エ ICT (schoolTakt・GoogleForms 等) を活用する。

(2) 「わかった・できた・おもしろい」の共通理解

泉小の目指しているもの

- **わかった** めあてを達成できた／習ったことを使えた／一人で問題が解けた
- **できた** 理解できた／モヤモヤが晴れた／自分の言葉で説明できた
- **おもしろい** もっとやってみたい／やる気が出る／さらに上のレベルに挑戦したい

児童の捉え方

- 「わかった・できた」についてはほぼ同様であったが、「おもしろい」は「授業でおもしろいことをしたとき」など、ただ『楽しい』と捉えている児童もいた。

(3) その他の取り組み

① 家庭学習のすすめ

- 家庭学習の手引きを年度初めに配布し保護者会でも説明をしている。記録プリントを配布し定着を図っている。

② 泉小教師のための授業スタンダード

- 「机上に出すものを確認する」「児童が聞く姿勢になってから話し始める」など20項目について学期ごとに到達度を振り返っている。

2 研究成果

(1) 各学年の成果

低学年では、自分の考えを正確に友達に伝えることは難しいが、話型をあえて示さずに話し合い活動を行ったところ「話し合いはおもしろい」「みんなで意見を出し合うことでわかった」と振り返る児童が多くなった。また、質問するときの観点や話型を示しながらグループでの話し合い活動を行った単元では、「どんな質問をすればいいかわかった」「質問し合うのが面白かった」と振り返ることができた。高学年でも、児童同士の話し合いから学びが深まるように『話型』を示し事前に自分の考えをもつ時間を設定したところ、進んで話し合いに取り組み、友達とやり取りしながらまとめる力が身に付いた。話し合いが苦手な児童も抵抗が少なく参加できるようになってきた。

(2) 実態調査より

どの学年も「学び合い高め合う」ということに対して授業改善に取り組んできたところ「わかった・できた」と感じる児童が増えた。(図1)

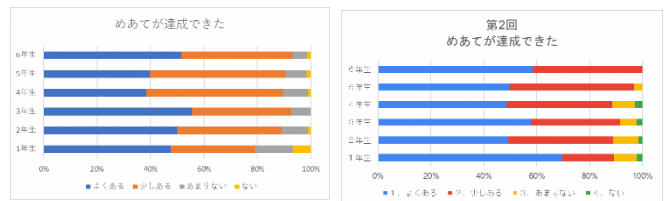


図1 「わかった」についての意識調査 (9月と11月)

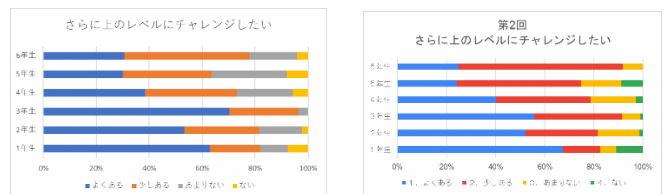


図2 「おもしろい」についての意識調査 (9月と11月)

「次の学習に生かそう」「もっとやってみたい」など次の既習事項を生かしたり、発展的な学習の意欲をもったりする児童がまだ少ない。(図2)

3 今後の課題

まだ自分の意見を伝えたり質問したりすることが苦手な児童もいるので、支援方法や手立てを考えていく。「おもしろい」は最終目標ではなく「おもしろい」をきっかけに「わかった・できた」に繋がることもあるので「おもしろい=ただ楽しい」ではなく「おもしろい=興味がわいてきた」になるように、場の設定や発問等授業展開の工夫をしていきたい。

「主体的に学ばせる授業」「大事なことを教える（伝える）授業の工夫」

～シンプルな授業・スモールステップの授業（わかる授業・できる授業）～

1 研究概要

【林小学校プラットフォーム(基盤)】

- ・「わかる授業・できる授業」(わかるまで! できるまで! の授業)
- ・「主体的に学ばせる授業」(目的を理解させ目標を指し示し到達させる授業)
- ・「大事なことを教える(伝える)授業」(思考・判断・表現ができるようにするための授業)

基礎的・基本的な知識・技能の確実な「習得」

～シンプル(簡単)な授業・スモールステップのある授業～

「やって見せ、言って、聞かせて、させてみて、できたことを褒める(評価する)授業」

(到達点(めあて)を指し示し、道筋をつけてあげ、励まし支え、到達点まで導く指導)

◎「伝わらなければ指導でない」 ◎「子と共に楽しむ授業」

目指す授業のために

(1) 学ぶこと(わかるようになること・できるようになること)の明確化

①授業の流れの全学年の統一化

「問題⇒課題(めあて)⇒見通し⇒自力解決⇒

学び合い⇒まとめ(⇒適用問題)⇒振り返り」

の流れで授業をパターン化して展開し、見通しを持って学習させる。

②課題は既習内容をもとに児童と一緒に設定し課題解決の必要感を持たせる。また、まとめは学習の中で出てきた言葉(板書やノート)を使い児童の言葉でまとめる。

③板書で使う「問題」「課題」「まとめ」等のテンプレートを全校で統一、また、ノート指導の統一化により学んだことが明確になるようにする。・振り返りができるノート作り

④資料提示やデジタル教科書の活用により視覚的な理解できるようにする。

(2) 基礎基本の徹底(スモールステップの授業)

①授業始めに、毎時間フラッシュ暗算や百マス計算に取り組み、基礎的計算力をつける。

②授業の初めに毎回既習内容の復習を行い、学習内容の積み上げを行う。

③ミライシードやドリル学習の取り組みにより基礎基本の定着を図る。



ICT機器を使ってのフラッシュ暗算

(3) 主体的・対話的で深い学びの充実

①課題の解決方法の見通しが持て主体的に取り組めるように、既習の学習を思い出させたり、ヒントカードを用意したり、支援の方法を工夫する。

②友だちと話し合い、考えを聞くことにより、自分の考えとの共通点や相違点を見つけさせ、整理していくことで理解を深めさせる。

③ICT機器(schoolTakt)などを用いて、課題解決活動の具体化・可視化を行い、多様な意見交流を行う。また、自分の解き方・考えをペア、グループ、全体に説明する機会を意図的に設定し、説明する力を育てる。

④振り返りにより自己の学習の確認をする。振り返りのできるノート作りを指導する。

2 研究成果(児童・生徒の変容等)

・授業の流れをパターン化することにより、児童が見通しをもって学習に取り組み、主体的な学びができるようになってきている。

・ICT機器を使って個別の考えを可視化し共有することによって、児童同士の学び合い(協働)につながっている。

・具体物を操作して学習する場面を設定することにより、個別の課題解決の場面では主体的に何通りもの方法を考えるようになってきている。

3 今後の課題

・自分の考えをグループや全体でわかりやすく説明する力(発表力・説明力)を育成することが課題。説明する場面を意図的に設定し経験させること必要。

・学び合いの質を上げていくために、交流や話し合いの場面では、学び合いの視点を明確にするとともに、ペアやグループなど学び合いの形態やグルーピングを工夫することも必要である。

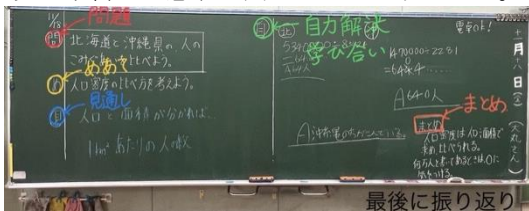
自分の考えに自信を持って のびのびと表現できる児童の育成

～主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善を通して～

1 研究概要

(1) 授業の流れの確立

【めあて→見通し→学び合い→まとめ→振り返り】の流れで授業を展開することで、子供たちが主体的に学習に取り組めるようにし、友達との学び合いの中で考えを広げて深められるようにした。また、振り返りをしっかりと行うことで、自分の学びへの気づきを促進し、次の学習への意欲を高められるようにした。



(2) 振り返りの充実

① 学習の達成感・学びの自覚の促進

振り返りの充実を図るために、【授業の流れ】を確実に実施し、しっかりと授業の中で振り返りを行うことで、子どもたちの習慣化を図った。継続的に取り組んでいくことで語彙が増えたり、書く内容を整理したりして、学びが充実していくようにした。

② 振り返りノートを活用

振り返りを1冊のノートに記入していきポートフォリオ化することで、自分自身の学びの積み重ねを実感できるようにした。また、書いてきた内容を振り返り、自分自身の成長を感じることで、自己肯定感が高まるようにした。



(3) ICTの活用

① Classroom・schoolTakt

Classroom・schoolTaktを活用して子供たちに資料やプリントを配布することで、活動や思考を深める時間を多く生み出せるようにし、自分の考えをPC上でまとめたり、クラス内でお互いの考えを共有したりすることを円滑に行えるようにした。

② 大型TV・プロジェクター・スクリーン

大型テレビ・プロジェクター・スクリーンを必要に応じて併用することで、子供たちに豊富な視覚的情報を提示した。

(4) 言語活動の充実

① 思考の可視化

子供たちのお互いの考えをみんなで確認できるように schoolTakt 等を活用して、自分で書いたノートの画像を貼ったり、イラストで表したり、タイピングで入力したりとさまざまな方法で子供たちの考えを表せるように、思考の可視化を図った。

② 多様な考えの共有

子供たちの考えを、Jamboard 等を活用してクラス全体で共有したり、出てきた意見をみんなで分類したりして、共通点や相違点を探す活動を通して自分の考えが深まるようにした。

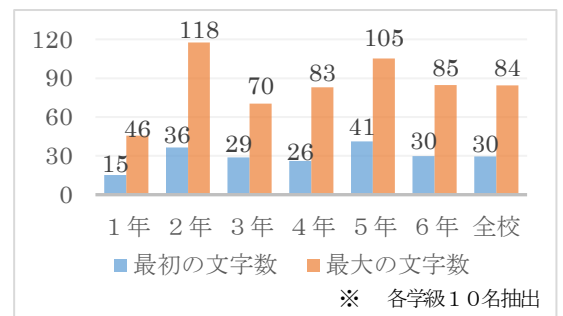


2 研究成果（児童・生徒の変容等）

(1) 振り返りの充実

継続的に取り組むことにより、学習を自分の言葉でより具体的に振り返られるようになってきた。

図 学年毎の振り返りの文字数の変容



(2) 教員の資質能力の向上

低・中・高の3ブロックに分かれて、「普段の授業から実践できること」を目指して、研究授業に向けて学校全体で計画的に研究を進め、指導力の向上を図ることができた。

3 今後の課題

- ・ 振り返りの充実をさらに進め、子供たちの学力の定着・向上につなげていく。
- ・ 子供たちの自己肯定感や学習意欲についての調査についても行っていく。
- ・ 手立てを全クラスで偏りなく実施していく。
(特にICTの活用)

所沢市立所沢中学校

「学び創造アクティブPLUS」学力向上推進事業の基本方針を具現化する『能動的学習者としての子ども観』に立った授業の構築

1 研究概要

(1)『能動的学習者としての子ども観』に立った授業の構築に向けて～「はじめに子どもありき」を基本理念として～

本来、子どもの学習や教育は、常に、その子どもが今何を考え、感じ、求め、困っているか等の事実を出発点として、絶えずそこへ立ち返り、進むべき方向もそこから考えるものである。これを具現化するために本校では本研究主題を定め、令和元年度より研究を進めてきた。

ご指導をいただいた先生方

- ・平野朝久先生（東京学芸大学名誉教授）
- ・嶋野道弘先生（元文京大学教授）
- ・山森光陽先生（国立教育政策研究所総括研究官）

(2)能動的学習者としての子ども観

子どもは教えられ、指示されなければ学ばないという「受動的学習者観」を教師が持っていれば、熱心であればあるほど教え込もうとし、子どもの自主的・主体的な学びの姿勢は育まれない。一方、子どもは本来、学ぶ意欲を持ち、自ら追究し、自分で自分を創っていく力を持っているという「能動的学習者観」を持っていれば、教師は子どもの「学び」が誘発されるような環境（条件）設定に努め、子どもが本来持つ能動性が発揮されるように授業を構築していく。これは、学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」の実現にもつながっていく。

(3)研究実践

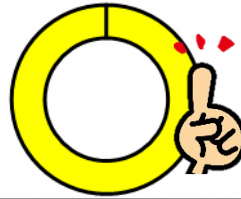
- ①生徒が学ぶ必然性を感じ、動機づけを高める学習材（課題）との出会いの手立て
 - ◇ 生徒の疑問から生まれる学習課題設定
 - ◇ 生徒の身近なものとの関連した課題設定
 - ◇ ICT機器を活用した視覚資料の提示
- ②能動的に学習を深める手立て
 - ◇ 少し難しい課題の設定（抽象度・複雑性で課題レベルを設定）
 - ◇ Jamboard・schoolTaktによる共有・学び合い
 - ◇ レベル別問題による個に応じた指導の実施
 - ◇ (美術科) アクリル絵の具の技法講座動画の作成・Chromebookによる共有
 - ◇ (数学科) 誤答の分析
- ③フィードバックから次時への意識向上の手立て
 - ◇ (体育科)「グッジョブカード」による相互評価
 - ◇ (音楽科) できた・がんばった・気づけたことを見つけて、認める。



【12/14 研究発表：課題解決に向けた学び合いの様子(数学)】

2 研究成果

子どもの能動性が客観的な数値として表れることは難しいが、教員の「教育に関する理念・子ども観・授業観」を問い直すという視点で行った、【研究前と比較して授業をする際に意識の変化があったか】というアンケートでは、100%の教員の意識の変化が見られた。



教員の意識変化 100%
では、どのような意識の変化があったか。

- ・授業内を時間で区切っていたが、その時間よりも生徒の表情や取り組み方で臨機応変に対応することを心がけるようになった。
- ・生徒の考える時間を多く取るようになった。
- ・生徒の発言や考えを止めないよう「待つ」姿勢ができた。
- ・教師が主体になってしまう姿勢を考え直し、常に子どもに視点をおくようになった。

生徒の変容（教職員による見取りの結果）

- ・理解が深まり、定着しているように感じる。何より生徒が楽しんで授業を待っていることが伝わる。
- ・仲間と協力して取り組む前向きな姿勢が多く見られるようになった。
- ・生徒が授業を、「正解を教わるものではなく、自分の中で正解を作り出すもの」として取り組んでいる。
- ・思っていた以上に生徒が活発に取り組んでいる。

3 今後の課題

子どもの「わかりたい・学びたい・できるようにになりたい」を大切に、子どもがどう考えるかに視点を当てて取り組み、より深く子どもの変化を見取りながら思考の深まりや能動性を見取っていく。また、「総合的な学習の時間」などで、より広く深く子どもの能動性が発揮される場面に視点を当てて、実践を深めていきたい。

生徒が主語になる学校づくり

～教授と活動のバランスに配慮した授業づくり～

1 研究概要

(1) 主題設定の理由

本校では、「生徒」に焦点を当てて、ここ数年研修に取り組んでいる。今年度は、「生徒の学び」にフォーカスし、「学び創造アクティブ PLUS クリエイト研究」として「教授と活動のバランス」を考えた授業実践の取り組みと、武蔵野美術大学に行き、「生徒主体の新しい授業を作ろう」を行った。その他、行事や日常生活の場面でも、生徒が主体となる活動を増やし、学校教育目標の最上位目標である「自律」に向けて取り組んだ。

(2) 研究の概要及び実践

以下、クリエイトに関する部分には【ク】武蔵野美術大学に関する部分には【武】とつける

① 学び創造アクティブ PLUS の授業改善チェック 10 の実施【ク】【武】

② 研修主任による先行授業【ク】

クリエイト研究を校内に周知するために、5月に選考授業を2年生理科【植物の体のつくりとはたらき】で行った。その際に授業の動画を録画・編集・作成し、後日、校内研修で全教職員に視聴する準備をした。

③ 授業づくりワークショップ【ク】

5月23日の校内研修で動画を視聴し、さらにワークショップとして「他教科でOKJ法(教授と活動のバランス)の授業をつくってみよう！」を実施した。この際には「国語」と「数学」の授業づくりを、教科担当を越えて全教職員で行った。

④ 生徒が主語になる授業づくり@ムサビ【武】

8月19日の校内研修を武蔵野美術大学で行い、「生徒主体の新しい授業づくり」を5グループに別れて、武蔵野美術大学の生徒とともにおこなった。

⑤ 3年生理科での実践【ク】

3年生理科の授業【地球から宇宙へ 太陽系の惑星】で実践を行った。

⑥ 校内研修による市川教授の講演【ク】

授業実践をもとに、10月17日に校内研修にて市川教授より、実践へのアドバイスと御講演をいただいた。

⑦ 5グループの実践【武】

それぞれのグループごとに授業実践を行った。

⑧ 校内研修部会での検討【ク】

⑨ 研究授業(1月30日本日実施)【ク】

教授と活動のバランス(OKJ法)の基本構造

① 教師説明(教師による説明)

② 理解確認(生徒の教え合い)

③ 理解深化(生徒のアクティブラーニング)

④ ふりかえり(生徒の省察)

⑩ 地域発表会【武】【ク】

今年度の研修テーマ「生徒が主語になる学校づくり」について地域に発表を行い、「生徒の自律」について、生徒・保護者・教職員・地域の人でディスカッションを行う。(2月13日実施予定)

2 研究成果(児童・生徒の変容等)

最初のアンケートで以前校内研修で取り組んだものの達成率が高く、今年度のテーマに関する部分が弱いことが分かっている。

(1) 「教授と活動のバランスに配慮した授業」【ク】

- ・自分たちで一度学んだことを教え合うことで、わからないことがわかった。(生徒アンケート)
- ・この時間があることで友達にも先生にも目立たずに質問することができてわかるものがふえた生徒アンケート)
- ・課題の中に、レベル差をつけることで、学力に関係なく、活動を充実させることができた。
- ・わかったこと、わからないことを書いていくことで今後の授業改善に活かせる。
- ・「わからないこと」を書いたあとに先生が教えてくれてうれしかった(生徒アンケート)

(2) 研修に取り組んだことによる教員の変化【武】

- ・3学期に入り、以前よりも生徒が主体的に学ぶ時間の設定や、教授と活動のバランスを考えた授業の実践、他の生徒と協働する授業の時間の確保ができている結果から、授業改善が進んでいると考えられる。

3 今後の課題

- ・主体的に取り組む様子が活発になったが、数値的な判断ができていない。
- ・単元構想→習得の授業でのOKJの取り組みと探究的な学習内容のバランスを考え、周知を図っていきたい。

『主体的に活動できる生徒の育成』

～主体的な学びの授業の定着に向けて～

1 研究概要

(1) 主題設定の理由

一昨年度の全国学力・学習状態調査から、本校の生徒は話し手の意図を捉えながら聞き自分の考えをまとめることや、既存の学習内容を生かし記述することに課題があることが分かった。

そこで、学習課題の設定を工夫して自分事として解決していこうとする工夫や、学習において、自分がその時間にどんなことを考え、どんなことを学習したのかを振り返り、次の学習につなげていけるような指導を継続することが、生徒の主体的な学びの促進に結びつくと考え本主題を設定した。

(2) 研究仮説・内容・方法

各教科・領域の指導において、次の手立てをとり、各教科の見方・考え方を働かせた深い学びとなる授業づくりを行えば、主体的に学ぶ生徒が育成されるであろう。

(手立て)

- ①学びへの必要感が高まるようなめあての設定
- ②課題の解決方法や結果、作業手順、時間配分など、生徒の視点に立った見通しを持たせる工夫
- ③学びの振り返りの価値付け

また、家庭学習の定着のために行っている「中央中タイム」の取組を継続することで、より生徒の主体性を育むことができるであろう。

2 研究成果

(1) 授業構成の明確化

1時限のめあてを明示し、生徒が見通しをもてる授業展開にするにはどうしたらよいかの研修をした。授業の終末を生徒の言葉の中からキーワードとして拾いまとめることや、各自の学びの捉え直しとしての振り返りの時間の確保に課題がある。

(2) 主体的・対話的で深い学びの授業づくり

生徒の主体的な活動を、各教科の特性に応じて位置付けた。また、各学年で学級会を開催し、自分たちの学級・学校を自らの手で作りあげようとする自治的活動の場を意図的に設けた。その結果、自分たちの生活をよりよくするため、課題を自分たちで解決するために話し合う意識が芽ばえてきた。

全学級に学級会グッズ・マニュアルをそろえ、いつでもどんなときでも話し合いができる環境整備を進めたい。

(3) 学習の定着化と教師の見届け

生徒による自己評価カード等を活用し、毎時の授業

を振り返る習慣付けを行っている。それを活用し、生徒がどの程度理解できたのかを確認するツールとして教員も有効活用し、次時の授業展開に役立てている。

(4) 家庭学習定着のための「中央中タイム」の取組

毎日、帰りの会前5分間を利用して「中央中タイム」を導入し継続している。これは、各自が1日を振り返り、その日の家庭学習の計画を立てる活動である。「中央中タイム」の取組を通して、1日を振り返り、自ら課題を設定して、学習活動に見通しをもって実践していくサイクルを習慣化することで、より生徒の主体性を育むことにつながっていると考える。

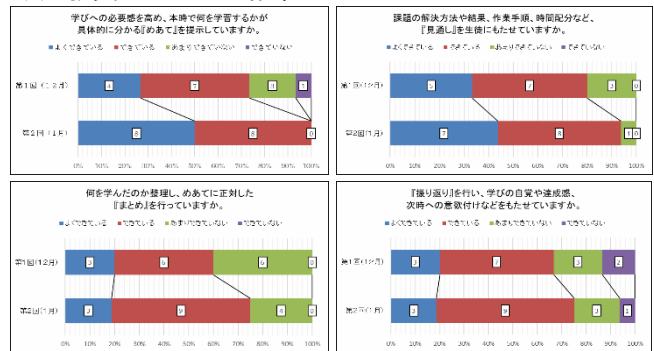
(5) 各種学習調査結果の活用と分析

県の学力学習状況調査や市のステップアップテスト等の結果を本校独自に分析した。そこから現状の課題を検討し、今後の学習支援に役立てた。

(6) ICTの積極的な活用

話し合い活動、各教科での学び合いの中に、ICTを効果的に活用するにはどうしたらよいかの研修をした。効果的な活用事例を校内で広められるようなシステムづくりを進めていきたい。

(7) 教員アンケート結果



3 今後の課題

ここまでの研究成果として、以下の2項目に対して意識の向上が見られたことが挙げられる。

①学びへの必要感が高まるようなめあての設定

②課題の解決方法や結果、作業手順、時間配分など、生徒の視点に立った見通しを持たせる工夫

課題としては、授業のまとめ・振り返りが十分にできていない点が挙げられる。具体的には、授業の終末に生徒の言葉の中からキーワードを拾いまとめることがまだ不十分であったり、各自の学びの捉え直しとしての振り返りの時間の確保が十分されていなかったりすることがある。今後も、主体的な学びの授業に関する研修を、個人単位、学校単位の両面から行っていくことで、改善を図っていきたい。

生徒が自ら学び、互いを高め合える授業の創造

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～

「生徒が必要感・達成感を大切に、自己肯定感を高め、未来を切り拓く力の育成

本校では、「はじめに子どもありき」を学校経営の基本理念とし、「学校は生徒のよさや可能性を伸ばすところ」、「学校は安全で安心して学べる」との全職員の共通認識の下、「全教職員の『誠意・創意・熱意』を結集した協働の学校づくり」の学校経営方針に沿って、本事業における研究主題を設定し、研究部を中心に、1年間に渡り全教職員で研究に取り組んだ。

1 研究概要

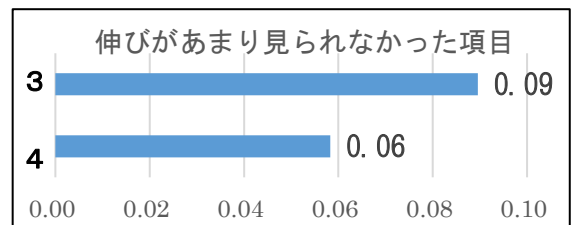
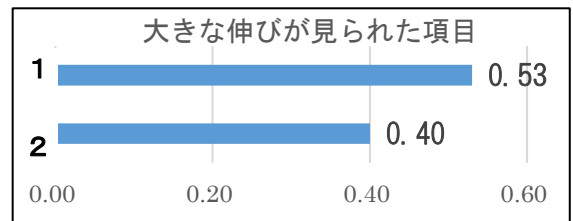
- (1) 指導者：嶋野道弘氏（元文教大学教授）
- (2) 研究の実施記録
 - ① 4月：研究テーマ、計画の決定
 - ② 5月：指導者講義、チェックリストの実施①
 - ③ 6月：校内研修「研究テーマの具現化に向け」
 - ④ 8月：指導案検討、全国学力調査問題の研究
 - ⑤ 9月：研究授業、指導者指導
 - ⑥ 10月：校内研修「50分の授業改革」
 - ⑦ 11月：研究授業
 - ⑧ 12月：研究協議、チェックリストの実施②
 - ⑨ 2月：研究発表、まとめと次年度への引継ぎ
- (3) 指導者による指導



- ① 5月31日（火）：講義「『学びの本質』に立つ授業スタンダードの具現」
- ② 9月12日（月）：研究授業と協議、指導
- (4) 校内教職員による研究授業（11月）と協議
- (5) 研究発表と講義 2月2日（木）
 - *学び創造 AP クリエイト研究校発表会
 - *市教セ「主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業づくり研修会」
 - *市教研「南陵中学校区授業研究会」
- (6) 「研修部だより」の発行

2 ここまでの研究成果（児童・生徒の変容等）

- (1) 生徒について *研究発表会以降を予定
- (2) 教職員について
チェックリストの結果から *5、12月実施



質問1：言語活動を取り入れた時間を設定している。
 質問2：考えが深まる「学び合い」を設定している。
 質問3：何を学習するか「めあて」を提示している。
 質問4：「振り返り」を行い、達成感を持たせている。

3 これまでの成果と今後の課題

中学校での学習指導に関する研究では、教科の特性を考慮し、教科別に研究を進めることが多いが、却って、このことが全校体制での研究を妨げることがある。

今回、本校の研究では、教科の枠を越え、構造化された1時間の指導を以下の3つの柱に分け、それぞれのグループに分担し、研究を進めた。異なる教科の視点で、授業を相互に参観し、意見を交換した。他教科の学びを知ったり、新たな気づきを得たりすることができた。



【校内研修グループ】

- 「めあて」部
- 「学び合い」部
- 「振り返り」部

チェックリストの結果からは、展開部にあたる言語活動や学び合いについては伸びが見られたが、めあてや振り返りについてはあまり伸びが見られなかった。今回の研究テーマの柱の必要感や達成感に関する項目であり、次年度以降の課題となった。

生徒にわかる喜びを味わわせるための授業づくり

～ICTを活用した、基礎基本を大切にした授業改善～

「生徒にとって受入れ易い発問となる授業づくり」

1 研究概要

・ICTを活用した基礎基本の定着

本校は、所沢市立教育センターから「ICTを活用した授業づくり研修会」の研究支援を受け、東京工業大学名誉教授 赤堀侃司先生のご指導をいただきながら研究を進めてきた。

具体的には、各教科において、基礎基本の定着が図れるよう、積極的にICT機器を活用し、その活用について、教職員間で交流、情報共有を行った。

ICT機器を活用することにより、基礎基本の定着に効果があり、生徒、教師とも意欲をもって授業に取り組むことができた。

副題である、「生徒にとって受入れ易い発問づくりとなる授業づくり」は、主体的・対話的で深い学びとなる授業づくりへのきっかけとなる視点として、教職員から取り上げられたものである。生徒にとって、考え、意欲的に活動できる発問、指示ができるよう取り組んだ。

2 研究成果

(1) 教材の提示における活用

～デジタル教科書の活用～

今年度より導入されたデジタル教科書を、各教科において積極的に活用している。

範読(国語)、資料の提示(社会)、図形などの提示(数学)、実験の手順(理科)、リスニング、リーディング(英語)などである。特に英語は、学習者用が導入されているため、個に応じて活用している。デジタル教科書の活用は、1時間の授業の中で、必要な場面にピンポイントで活用することによって、基礎基本の定着に効果をあげている。

(2) Chromebookの活用による授業展開

① 理科における活用

右の写真は、理科の授業において、実験の様子を写真に記録しているところである。実験後はスプレッドシートに実験結果を記録し、交流していっ



た。その場で記録を残すことができることや、他の生徒と協力しながらまとめを行うことができた。

② 美術科における活用

school Taktを毎時間活用して、教材の提示、作業手順の指示、作品の記録(写真)、自己評価、鑑賞まで実施した。写真は、鑑賞会を実施している場面である。自分のChromebookを使用して、他の生徒の作品を見ることができ、また、作品に対するコメントもその場で入力し見ることができた。school Taktは個人の進捗状況の把握はもちろん、個々の学習の記録の積み上げにも効果がある。他教科での使用も広がってきている。



③ 道徳における活用

道徳では、生徒の実態を調査するために、GoogleFormsを活用したり、意見交流を行うため、Jamboardを使用して授業を展開した。写真は「友達のよさ」の主題における授業について、意見交流を行っている場面である。発言を苦手とする生徒も書くことによって、自分の意見を発表することができた。



④ 総合的な学習における活用

各教科以上に活用している。1年は「地域環境学習」2年は「職場訪問のまとめ」において、Googleスライドでまとめ、クラス、学年の発表会を実施した。2、3年では、校外学習、修学旅行の事前学習として、インターネットを活用してコースづくり等を行った。

3 今後の課題

生徒は毎日いずれかの授業でChromebookを活用し、また、家庭で課題の取組やテスト勉強に活用している生徒もいる。ICTの活用により、自ら学ぶ意欲を持ち、教師が予想以上の意見やまとめを行う生徒が見られる。ICTの活用は、「わかる喜びを味わわせるための授業づくり」の手段であり、活用自体が目的でないことを意識しつつ、主体的・対話的で深い学びの実現につなげられるよう、引き続き授業改善に取り組んでいきたい。

生徒一人一人を大切にしている校内研修

～生徒にとって、必要感・達成感を感じられる授業の実践を通して～

1 研究概要

(1) 研究の仮説

① ICTの積極的な活用を行えば、生徒にとって必要感・達成感を感じることができるのではないか。

ア 各教科にて教材研究を行い、効果的なICT機器の活用場面を取り入れていく。

イ タブレットを使用する授業を実施し、生徒の情報活用能力を高める。

ウ 校内研修の充実やICT支援員を効果的に活用することにより教員のICT活用能力を高めていく。



ICTを活用した授業の様子

② 言語活動の充実や話し合い活動の充実を図れば、生徒にとって必要感・達成感を感じることができるのではないか。

ア 各教科における話し合い活動を授業に取り入れ、話し合い活動の充実を図る。

イ 国語科を中心として、言語活動の充実を図り、基礎基本の充実を図る。

ウ 全教科の授業評価（生徒によるもの）を実施し、生徒にとって必要感・達成感を感じられるか検証していく。

③ 振り返りの活動の充実を図れば、生徒にとって必要感・達成感を感じることができるのではないか。

ア 「振り返り活動」についての研修を行い、共通理解を図り、研修を推進していく。

イ 各教科で、授業の振り返りを実施し、生徒に自己の変容について考える時間を設定していく。

ウ ノート、ワークシートを工夫して生徒に、「振り返り」を行わせるとともに、積み重ねていく。

(2) 研究の実践

ア 学力検査分析の実施（8月23日）

イ 指導者の招聘（8月24日）

指導者…渡野邊先生、長谷川先生

（所沢市教育委員会学校教育課指導主事）

ウ 「学び創造アクティブ PLUS アクティブ研究」授業研究会・協議会の実施

2 研究成果

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着状況

図1は所沢市で実施しているステップアップ調査の図である。現3年生の数学の経年変化をまとめた図である。3回目には、市平均を3.3ポイント上回るまで、学力の向上を図ることができた。

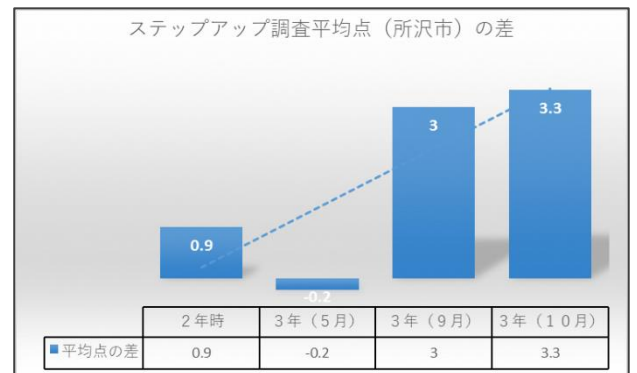


図1 ステップアップ調査（3年数学）における経年変化グラフ

(2) 生徒による授業評価について

全教科、図2のように生徒による授業評価を実施した。授業の「満足度」、「理解度」、「取り組み度」について検証し、おおむね満足度は高まった。教科部会の資料としても検証することができた。

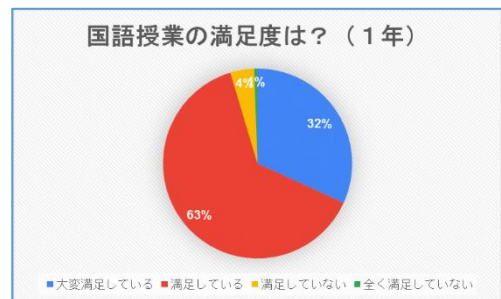


図2 授業評価アンケート（1年国語）

3 今後の課題

- ・個別最適化に向けたICTの活用について
- ・「振り返りを大切にした授業」の評価方法、評価の場面について
- ・主体的・対話的で深い学びの実現について